



故きを温ねて、新しきを知る 帯広葵学園のあしあと66

「赤い山青い山白い山」のふる里

学校法人帯広葵学園 理事長 上野敏郎

新年のあいさつ

新しい年を迎えました。またこの一年、みなさんと一緒に新しい気持ちで「だれでもはじめは子どもだった」ことを忘れず、「すべての子どもの利益のために」それぞれの仕事に努めたいと思います。どうぞ、よろしくお願いします。

子守唄の話

さて、帯広葵学園では北原白秋が作詞した童謡「赤い鳥小鳥」と、白秋が高く評価する帯広地方に伝わる子守唄「赤い山青い山白い山」を大切にしています。この方針は変わりませんが、私はこの子守唄を帯広生まれの帯広育ちとする説には疑問を持ってきました。その理由は、歌詞にある「ねんね」と「とち餅」の言葉です。

そもそも、子守唄はお母さんがわが子を寝せるときに歌う唄です。極めて即興性に特徴がある唄とも言われています。つまり、子守唄は、お母さんがそのとき頭に浮かんだ言葉にリズムをつけて歌う特性を持つということになります。

そう考えるとき、その時お母さんの頭に浮かぶ言葉は毎日の生活の中から選ばれることとなります。「赤い山青い山白い山」には「ねんね」「とち餅」が出てきますが、この二つの言葉が、帯広地方に日常語としてあったらどうかと思うのです。

「ねんね」とは、ふつうは「赤ちゃん」のことを言います。「とち餅」とは、栃ノ木の実をつぶしてできた粉の入った餅を言います。私の調べでは、100%とは言えませんが、どちらも帯広地方には定着していた事実はありませんでした。

開拓の歴史と「赤い山青い山白い山」

では、なぜ古くからこの子守唄が「帯広地方に伝わる子守唄あるいは「帯広地方の子守唄」と言われてきたのでしょうか。

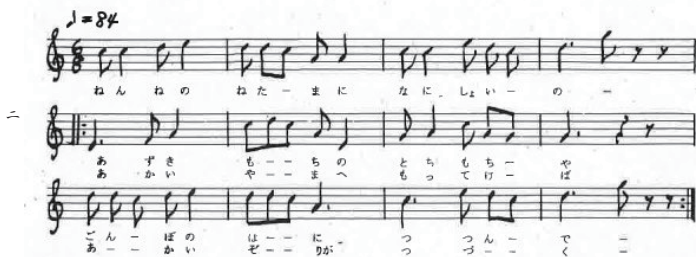
それは、帯広地方の成り立ちに大きく関係すると思います。つまり、「ねんね」や「とち餅」が毎日の暮らしの中にあつた地域からこの帯広に入植した人々によってこの子守唄は歌われ出したと推測せざるを得ません。その考えに立って調べた結果たどり着いたのが、現在の福井県勝山市北谷地区です。昔の北谷村です。

北谷には、別紙の通りの子守唄がありました。違いは、「こんぼの葉につつんで」があるかないか、それと、「赤い鳥」「青い鳥」「白い鳥」の『鳥』が、『やうり』になっている箇所ですが、この解釈については別の機会に説明したいと思います。

昭和58年発行
『北谷見聞録』（北寿会編）より

北谷の子守うた

【勝山】



(NHK資料室テープ)

ねんねのねたまに
何しよいの
あずき餅の とち餅や
こんぼの葉に つつんで
赤い山へ 持ってけば
赤いぞうりが つづく
青い山へ 持ってけば
白い山へ 持ってけば
白いぞうりが 続く

その夜に大雨
降りだいて
かさかさ屋へと かけこんで
かさかさ一本 貸せというた
あるものないというて
貸さなんだ
やれやれ 業わき 腹だちや
そのように お腹か立つなれば
今度目い のちのあつたおり
とついで 貸しましよや

